

# チャラカ・サンヒターのプラーナ説 — プラシャスタパーダヴァーシュヤの宇宙論との比較考察 —

長友 泰潤

哲学研究室

2010年10月20日受付; 2010年11月9日受理

## The Theory of Prāṇa in Carakasamhitā

Taijun Nagatomo

*Laboratory of Philosophy, Minamikyusyu University,  
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 20, 2010; Accepted November 9, 2010

In the view of Carakasamhitā (CS), Vāta (or Vāyu) consists of prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna. Vāta brings the object perceived by the five sense organs and manas to the ātman. So internal organs like the manas and buddhi, share the function vāyu in common.

The internal organs are connected to the five sense organs by this vāyu function.

And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It is conducive to good health, the improvement of strength and luster, growth, and complexion in addition to the attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about cohesiveness among, and movement by, and cohesiveness among the sun, moon, stars and planet. The Vāyu function sustains the earth also.

Accordingly the Praśastapādabhāṣya (PD) introduces the discussion of the order of creation and destruction of the four ultimate material substances. After the lapse of the one hundred divine years known after Brahma (creator), There comes the time for the final deliverance of The Brahma existing at that Time arrives. Then there arises, in the Supreme Lord of all worlds, a desire for the destruction of all creation. This periods is for the sake of the resting at night necessary for all living beings wearied by the troubles caused by repeated births and deaths.

As for the destruction of those that have already been created, there occur certain actions, owing to the destructive wish of the Supreme Lord as well as to the conjunctions of the souls and atoms. From these actions there comes about a disruption of the atoms constituting the bodies and the sense-organs. This disruption leads to the destruction of the conjunctions of atoms. This brings about the destruction of all things down to the atoms. Then there comes about the successive destruction or re-absorption of the ultimate material substances, viz. Earth,

Water, Light and Vāyu (air). Then once again, there arises, in the Supreme Lord, a desire to bring about creation, for the purpose of bringing about the experience of pleasure and pain for the souls. Then there appear under the influence of unseen potential tendencies, that began to operate in all souls. These actions bring about the mutual conjunctions of the Vāyu.

And PD also presents a view that recognizes two forms of this Vāyu; one in the form of atoms and another in the form of products. The product form is again divided into four: the body, the sense-organ, the object and the prāṇa. The sense-organ relating to the Vāyu is called skin (tvak) which covers the entire body. It provides instrument sense of touch for all living beings. And prāṇa is the Vāyu which exists with in the body of beings and it is the responsible for the transport for the various fluids, secretions and other materials in the body. It consists of five types as prāṇa, apāna, samāna, udāna and vyāna, as a result of its various functions.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of prāṇa found in the PD and the view presented in the CS. In the CS, prāṇa brings about cohesiveness and movement among the sun, moon, stars and planets, while sustaining the earth at the same time, However the PD, has no mention of the relationship between prāṇa and the natural phenomena like the sun and earth.

Key words: Carakasamhitā, Praśastapādabhāṣya, prāṇa.

## 序

チャラカ・サンヒターでは、プラナーナ（ヴァーユ）は身体的な諸機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命維持の原因とされるだけではなく、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化にまで関与しているとされる<sup>註1)</sup>。この宇宙論ともいえる壮大な説はインド諸学派の中でどのような位置づけとなるのかを探求し、その内容をさらに深く考察するために、本稿では、まず、ヴァイシェーシカ学派の代表的な論書であるプラシャスタパーダヴァーシュヤ<sup>註2)</sup>の宇宙論と比較考察することとした。

## 1. プラシャスタパーダヴァーシュヤの宇宙論

### a) 宇宙の破壊と創造

まず、プラシャスタパーダヴァーシュヤでは次のような宇宙論を展開している。

「ここでは、今度は、四つの元素の創造と破壊の次第が説かれる。梵天時間の百年の終わりにあたって、その時にいる梵天が命終を迎える時、輪廻に打ちひしがれたすべての生き物たちに夜の休息を与えるために、全世界の主である最高神に〔世界を〕破壊しようとの願望が生ずる。その時、身体と感官と元素とを結びつけている、すべての自己に存する不可見力（=功德と罪障）が活動を停止する。その時、最高神の欲求と〔すべての生き物たちの〕自己と原子との結合より生ずる運動とにより、身体と感官の原因である原子どうしに分離が生じ、それによってそれらの結合が消滅する。その時、それらは原子段階に到達するまで消滅する。」

ihedānīm caturṇām mahābhūtānām  
sr̥ṣṭisamhāravīdhīrucyate/  
brāhmaṇa mānena varṣasātānte  
vartamānasya brahmaṇo 'pavargakāle  
saṃsārakhinnānām sarvapraṇīnām niśi  
viśrāmārthaṃ  
sakaḷabhuvanapatermaheśvarasya  
saṃjihīrṣāsamakālaṃ śarīrendriya-  
mahābhūtopanibandhakānām  
sarvātmagatānāmadr̥ṣṭānām vṛtti-  
nirodhe sati maheśvarecchātmaṇu-  
saṃyogajakarmabhyaḥ śarīrendriya-  
kāraṇāṇuvibhāgebhyas tatsaṃyoga-  
nivṛttau teṣāmaparamāṇvanto  
vināśaḥ<sup>註3)</sup>

ここでは、梵天の願望により始まる宇宙の破壊と消滅が説かれている。この時、身体と感官と元素を結び付けている不可見力が停止し、原子どうしが分離し結合が消滅し、原子段階に到達するまでの消滅が起こるとされる。

さらに、次のような宇宙論が展開される。

「同様に、地・水・火・風の元素のすべては、まさにこのような順序で、後のものに先だててそれぞれ前のものが消滅する、その後、原子はばらばらになって存続する。自己は功德と罪障と潜在印象に浸透せられて、まったく同じ期間存続する」

tathā pṛthivyudakajvalanapavanānām  
api mahābhūtānām anenaiva krameṇo-  
uttarasminnuttarasmin sati pūrvasya  
pūrvasya vināśaḥ tataḥ pravibhaktāḥ  
paramāṇavovatiṣṭhante dharmādharmas-  
aṃskārānuviddhā ātmānastāvantaṃ  
eva kālam/<sup>註4)</sup>

ここでは、地、水、火、風の四つの元素の消滅が説かれている。

次に、宇宙の生成が説かれる。

「その後また、生き物たちの享受があるようにと、最高神に創造の願望が生ずる。その直後に、全ての自己に存し活動を始めた不可見力（=功德と罪障）を待って、その〔自己と原子との〕結合が生じる。」

tataḥ punaḥ prāṇinām bhogabhūṭaye  
maheśvarasiṣṭkṣānantaraṃ sarvātma-  
gatavṛttilabdhr̥ṣṭāpekṣebhyas-  
tatsaṃyogebhyaḥ pavanaparamāṇuṣu  
karmotpattau<sup>註5)</sup>

ここでは、最高神に宇宙を創造しようとする願望が生じ、不可見力を待って、自己と原子の結合が始まるとされている。宇宙の消滅と生成は全て最高神の願望から起こるものである。

さらに、宇宙の生成の詳細が説かれる。

「その時、風の原子は互いに結合することによって、二原子体などの順序で大きな風が生じ、それが揺れ動きながら虚空の中に存立する。その直後に、まさにその風の中に、水の原子からまったく同じ順序で大きな水たまりが生じ、満ち溢れながら存立する。その直後に、まさにそこに、地の原子から大きな地が生じ、凝集して安住する。その直後に、まさにその水たまりに、火の原子から二原子体などの順序で大きな火の塊が生ずる。それは何ものにも圧倒されないから、輝きわたりながら存立する。」

teṣāṃ parasparasāmyogebhyo dvyaṇukādi-  
prakrameṇa mahān vāyuḥ samutpanno  
nabhasi dodhūyamānastiṣṭhati/  
tadanantaraṃ tasminneva vāyāvāpyebhyaḥ  
paramāṇubhyas tenaiva krameṇa mahān  
salilanidhirutpannaḥ poplūyamāna-  
stiṣṭhati tadanantaraṃ tasminneva  
pārthivebhyaḥ paramāṇubhyo mahā-  
pṛthivī saṃhatāvatiṣṭhate/  
tadanantaraṃ tasminneva mahodadhu  
taijasebhyo'ṇubhyo dvyaṇukādi-  
prakrameṇotpanno mahāmstejorāṣiḥ  
kenacidanabhibhūtatvāddedīpyamāna-  
stiṣṭhati/<sup>註6)</sup>

ここでは、風から水が、水から地が、地から火が生

じるといふ元素發生の次第が説かれている。

さらに、四元素發生後について述べられている。

「このように、四つの元素が生じた時、最高神の思いだけから、地の原子を伴う火の原子から、大きな卵が新造される。その中に、〔最高神は〕蓮華のような四面を持つ、全世界の太祖である梵天を全世界とともに生ぜしめ、生類の創造を命ずる。そして、最高神に命ぜられた梵天は、優れた知識と離欲と超能力を具えており、生き物たちの業の熟するのを知り、業に相応しい知識と〔苦樂の〕享受と生命力をもった、意より成る息子であるプラジャーパティ神を、人祖マヌと神々と聖仙たちと祖霊たちの群れを創り、さらにみずからの口と腕と股と足から四つの階級（＝バラモン階級・クシャトリヤ階級・ヴァイシャ階級・シュードラ階級）を創り、また雑多な生き物を創り出す。それから、〔梵天は〕この者たちに、潜勢する業に相応しい功德・知識・離欲・超能力を賦与するのである。」

evam samutpanneṣu caturṣu mahābhūteṣu  
maheśvarasyābhidhyānamātrāt  
taijasebhyo-’ṇubhyo  
pārthivaparamānusahitebhyo  
mahadaṇḍamārabhyate tasmimścatur-  
vadanakamalaṃ sarvalokapitāmahaṃ  
brahmāṇaṃ sakalabhuvanasaहितamutpādyā  
prajāsarṅge viniyunkte / sa ca  
maheśvareṇa viniyukto brahmātiśaya-  
jñānavairāgyai’svaryasampannaḥ  
prāṇinām karmavipākam viditvā  
karmānurūpa-jñānabhogāyusaḥ bhūtān  
prajāpatīmmanāsān  
manudevarṣipitṛgaṇān mukha-  
bāhūrupādātascaturō varṇānanyāni  
coccāvācāni bhūtāni ca sṛṣṭvāśaya-  
nurūpaiddharmajñānavairāgyaiśvaryaiah  
saṃyojayatīti//<sup>註7)</sup>

ここでは、四元素が生じてから世界の創造の完結までが説かれている。四元素が生じた時、最高神の願いから、梵天と全世界が、そして生類が生じ、さらに、梵天によって、プラジャーパティ神、人祖マヌ、聖仙、祖霊たちが生じ、口と腕と股と足から四つの階級が生じるとされる。そこからさらに、雑多な生き物が創造される。

## b) プラーナ（風）

プラシヤスタパーダヴァーシュヤでは風について次のような説明がされている。

「〔風は〕風性〔という下位の普遍〕と結びついてゐるがゆえに風である。

〔風は〕触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜在印象を有する。この触は非熱・非冷であるから燃焼によって生じるものではない。〔このことは『ヴァイシェーシカ・ストラ』四・一・一三に〕色を有しないものは眼には見えないと説かれているから、〔風には〕数を始め

とする七つ〔の性質〕がある。『ヴァイシェーシカ・ストラ』五・一・一四に〕草の運動が説かれているから、〔風には〕潜在印象がある。」

vāyutvābhisambandhādvyūh/sparśasamkhyā-  
parimāṇapṛthaktvasaṃyogavibhāga-  
paratvāparatvasaṃskāravān/  
sparśosyānuṣṇāsītayve satyapākajaḥ/  
arūpiṣvacākṣuṣavacanāt sapta  
saṃkhyādayaḥ/ tṛṇakarmavacanāt  
saṃskārah/<sup>註8)</sup>

ここでは、ヴァイシェーシカ・ストラが引用され、風の九つの性質（触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜在印象）が示されている。草の運動が潜在印象の証拠とされている。

さらに、風の種類が述べられている。

「そして、この風は、原子と結果と〔の別〕があるから二種類である。そのうち、結果を特質とする風には、身体・感官・対象・プラーナ（氣息）の四種がある。そのうち、身体は、非胎生のもののみであり、マルット神（風神）の世界に属し、地の部分に支えられることによって〔苦樂の〕享受が可能である。感官は、全ての生き物に触を顕わにし、地などによって圧倒されていない風の部分によって新造され、全身に遍満する皮膚という感官である。他方、対象は、現に知覚されつつある触の基体であり、触・音声・保持・振動を証相としており、ジグザグに進むことを本性としており、雲などを推したり保持したりする力がある。」  
sa cāyaṃ dvividho ‘nukāryabhāvāt/  
tatra kāryalakṣaṇaścaturvidhaḥ  
śārīram indriyaṃ viśayaḥ prāṇa iti/  
tatrāyonijameva śārīraṃ marutām  
loke pārthivāvyaopapaṣṭambhāccopabhoga-  
samartham/ indriyaṃ sarvaprāṇinām  
sparśopalambhakaṃ pṛthivyādy-  
anabhibhūtair vāyvavayavairārabdhām  
sarvaśārīravāpi tvagindriyam/  
viśayastūpalabhyamānasparśādhīṣṭiāna-  
bhūtaḥ sparśaśabdadhṛtikampa-  
liṅgastiryaggamanasvabhāvo  
meghādipreranadhāranādisamarthah/<sup>註9)</sup>

ここでは、風には、身体・感官・対象・プラーナ（氣息）の四種があるとされている。そのうち、感官とは皮膚であり、対象は、現に知覚されつつある触の基体であり、保持したりする力があるとされる。

さらに、知覚されない風がどのように推論されるかや、風の呼び名の変化について述べられている。

「それは知覚されないけれども、凝集作用によって多数であることが推論される。また凝集作用とは、正反対の方向に動く、速力の等しい風どうしが会合することである。それもまた、部分を有するもの（全体）である二つの風が上方に進むことによって推論される。また、草などの動きによって〔そのことはまた推論される。〕プラーナ（氣息）は、身体の内にあつて精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であり、単一であるが、動きの

違いによってアパーナ（呼気）などと命名される」  
 tasyāpratyakṣasyāpi nānātvaṃ  
 sammūrchanenānumīyate/  
 sammūrchanam punaḥ samānajavayor  
 vāyvorviruddhadikkriyayoḥ sannipātaḥ  
 sopi sāvayavinorvāyvorurdhvagamanenā-  
 anumīyate tadapi tṛṇādīgamaneneti/  
 prāṇontaḥśarīre rasamaladhātūnām  
 preraṇādiheturekaḥ sankriyābheda-  
 dapānādīsañjñām labhate/<sup>註10)</sup>

ここでは、風が凝集作用や草などの動き等で推論され、風のうち、プラナー（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であり、単一であるが、動きの違いによってアパーナ（呼気）などと命名されるとされている。

## 小 結

プラシヤスタパーダヴァーシュヤでは以下のような梵天の願望により始まる、宇宙の破壊と消滅が説かれている。

まず、身体と感官と元素を結び付けている不可見力が停止し、原子どうしが分離し結合が消滅し、原子段階に到達するまでの消滅が起こるとされる。ここでは、地、水、火、風の四つの元素の消滅が説かれている。風は基本的な宇宙の構成元素の一つである。次に、最高神に宇宙を創造しようとする願望が生じ、不可見力を待って、自己と原子の結合が始まるとされている。さらに、風から水が、水から地が、地から火が生じ、そして、四元素が生じた時、最高神の願いから、梵天と全世界が、そして生類が生じ、さらに、プラジャーパティ神、人祖マヌ、聖仙、祖霊たちが生じ、口と腕と股と足から四つの階級が生じるとされる。そこからさらに、雑多な生き物が創造される。

次に、プラシヤスタパーダヴァーシュヤでは風について以下のような言及がなされている。

まず、風の九つの性質（触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜在印象）が示され、草の運動がその証拠とされている。また、風には、身体・感官・対象・プラナー（氣息）の四種がある。そのうち、感官とは皮膚であり、対象は、現に知覚されつつある触の基体である。そして、触・音声・保持・振動を証相とし、ジグザグに進むことを本性としており、雲などを推したり保持したりする力があるとされる。

風は凝集作用や草などの動き等で推論され、風のうち、プラナー（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であり、単一であるが、動きの違いによってアパーナ（呼気）などと命名されるとされている。

## 2. チャラカ・サンヒターのプラナー説とプラシヤスタパーダヴァーシュヤの説との比較検討

プラシヤスタパーダヴァーシュヤの説では、風は基本的な宇宙の構成元素の一つであり、梵天の願望により始まる、宇宙の破壊と消滅の中で、重要な働きをするものである。宇宙を創造しようとする願望が生じたのち、不可見力を待って、自己と原子の結合が始まり、風から水が、水から地が、地から火が生じ、そして、四元素が生じるとされる。また、九つの性質（触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜在印象）があり、草の運動がその証拠とされる。また、風には、身体・感官・対象・プラナー（氣息）の四種があるとされる。

一方、チャラカ・サンヒターでは、風（ヴァータ・ヴァーユ）は基本的な元素であることは同じであるが、乾燥・軽さ等によって、増大し、湿り・重さ等によって減少するとされ、風の性質ではなく、風を増大させたり、減少させたりする外的要因について述べられているにすぎない。また、風はプラナー、ウダーナ、ヴィヤーナ、アパーナの四種からなり、身体を保持するものとされる<sup>註11)</sup>。

プラシヤスタパーダヴァーシュヤの説でも、風のうち、プラナー（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であり、単一であるが、動きの違いによってアパーナ（呼気）などと命名されるとされており、チャラカ・サンヒターというプラナー等の四種の風を予想させるものがある。

さらに、チャラカ・サンヒターでは、正常な状態にある風がマナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとする。また、風は、身体のみならず機能も有効に働かせ、病気から守り、生命を保つ生命維持の原因とされる<sup>註12)</sup>。

プラシヤスタパーダヴァーシュヤの説では、風には、身体・感官・対象・プラナー（氣息）の四種があり、そのうち、感官とは皮膚であり、対象は、現に知覚されつつある触の基体であるとする。チャラカ・サンヒターのように、マナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとはされていない。風は皮膚感官そのものであり、感官全体に影響を与える存在ではない。

また、プラシヤスタパーダヴァーシュヤの説は、チャラカ・サンヒターが説くように<sup>註13)</sup>、太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化をもたらすものとしての風は想定していない。風は触・音声・保持・振動を証相とし、ジグザグに進むことを本性としており、雲などを推したり保持したりする力があるとされる。

また、チャラカ・サンヒターでは、医学的な言及が見られる。病気等の原因となる突然激化する風に医者は対処しなければならず、また、風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役にたつとされる<sup>註14)</sup>。

プラシヤスタパーダヴァーシュヤの説では、風のう

ち、プラナーナ（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であるとされ、身体の機能に何らかの関係はあるように思われるが、チャラカ・サンヒターで見られるような、医学的な言及はない。

## 結 論

プラシャスタパーダヴァーシュヤの宇宙論では、梵天の願望により始まる、宇宙の破壊と消滅の中で、重要な働きをするものである。宇宙を創造しようとする願望が生じたのち、不可見力を待って、自己と原子の結合が始まり、風から水が、水から地が、地から火が生じ、そして、四元素が生じるとされる。風は基本的な宇宙の構成元素の一つである。また、触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜在印象という九の性質があり、草の運動がその証拠とされる。また、風には、身体・感官・対象・プラナーナ（氣息）の四種があるとする。このうち、プラナーナ（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であり、単一であるが、動きの違いによってアパーナ（呼気）などと命名されるとされており、これはチャラカ・サンヒターでいうプラナーナ等の四種の風を予想させるものがある。

また、風の四種のうち、感官とは皮膚であり、対象は、現に知覚されつつある触の基体であるとする。チャラカ・サンヒターのように、マナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとはされていない。風は皮膚感官そのものであり、感官全体に影響を与える存在ではない。

プラシャスタパーダヴァーシュヤの説では、風は触・音声・保持・振動を証相とし、ジグザグに進むことを本性としており、雲などを推したり保持したりする力があるとされるが、風そのものが影響力を持ち、太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化をもたらすとは捉えていない。プラシャスタパーダヴァーシュヤの説では梵天の願望に始まる宇宙の生成は、不可見力が重要な役割を果たしている。また、風のうち、プラナーナ（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であるとされ、身体の機能や身体の正常な働きに、何らかの関係はあるように思われるが、チャラカ・サンヒターで見られるような、医者行動を含んだ医学的な言及はない。これは、医学論書としてのチャラカ・サンヒターの特徴と考えられる。

## 摘 要

プラシャスタパーダヴァーシュヤの説では、梵天の願望に始まる宇宙の生成の過程で、風は重要な四元素の一つではあるが、風そのものが影響力を持ち、太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化をもたらすとは捉えていない。むしろ、不可見力が重要な役割を

果たしている。また、チャラカ・サンヒターのように、マナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとはされていない。さらに、風のうち、プラナーナ（氣息）は、身体の内において精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因であるとされ、身体の機能や身体の正常な働きに、何らかの関係はあるように思われるが、チャラカ・サンヒターで見られるような、医者行動を含んだ医学的な言及はなく、これは、医学論書としてのチャラカ・サンヒターの特徴であると思われる。

## 注 記

- 1) 長友泰潤「チャラカ・サンヒターのプラナーナ説 - シャンカラ説との比較研究 -」南九州大学研究報告 人文社会科学編38号(B) pp.29-35 2008. 4.
- 2) Praśastapādabhāṣya (以下 PD) ed by Vindhyesvari Prasad Dvivedin., Sri Garib Dass Oriental Series-13., Delhi 1984.
- 3) PD. p.48. ll. 7-15 本多恵 『ヴァイシュエシカ哲学体系』平成2年 国書刊行会 p.85参照 宮元啓一『インドの「多元論理学」を読む』平成20年 春秋社 pp.34-35参照.
- 4) PD. p.48. ll. 15-19 本多上掲書 p.85参照 宮元上掲書pp.35参照.
- 5) PD. p.48. ll. 19-21 本多上掲書 pp.85-86参照 宮元上掲書pp.35参照.
- 6) PD. p.48. l. 21~p.49. l. 7 本多上掲書 p.86参照 宮元上掲書pp.35-36参照.
- 7) PD. p.48. ll. 7-17 本多上掲書 p.86参照 宮元上掲書p.36参照.
- 8) PD. p.44. ll. 1-5 本多上掲書 pp.77-78参照 宮元上掲書pp.32-33参照.
- 9) PD. p.44. ll. 5-12 本多上掲書 p.78参照 宮元上掲書p.33参照.
- 10) PD. p.44. ll. 12-18 本多上掲書 p.78参照 宮元上掲書pp.33-34参照.
- 11) Carakasamhitā (以下 CS) ed by V. Bh. Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, Varanasi 1988 VOL. XCIV. Vol. I., p.236., ll. 10-16. p.237., ll. 15-20. 矢野道雄『インド医学概論』（科学の名著第Ⅱ期）昭和63年、朝日出版 pp.84-85参照.
- 12) CS., p.237. ll. 15-20. p.237., l. 35~p.238., l. 3 矢野上掲書 pp.85-86参照.
- 13) CS., p.238., l. 11-15 矢野上掲書 p.86参照.
- 14) CS., p.240., l. 20-23 矢野上掲書 p.86参照.